撮影：山田有香

JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します

「小さな物語を描く」 2018／キャンバス、アクリル絵具

日本近代美術の成り立ちや、日本の美術界の状況を批判的に表現してきた作品で知られる作家が近年取り組んでいるのが、今回紹介するシリーズ作品「小さな物語を描く」です。携帯電話で撮影した何気ない個人的日常風景を、あらためて絵画作品とすることで、共感や親近感を誘発します。大胆な作風の変化のようでありつつも、そこには歴史と自身の接続あるいは断絶を切実に模索する作家の姿勢が表れているかのようです。

久松知子 ひさまつ・ともこ

1991年 三重県生まれ。画家。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程修了。2019年同大学院博士課程中退。日本の近現代美術の制度や歴史観への疑問を出発点に、絵画を制作している。近年は、「小さな物語を描く」とのテーマに、日常の情景を描くシリーズを展開。2015年、第7回絹谷幸二賞奨励賞、第18回岡本太郎現代芸術賞岡本敏子賞受賞。2018年、大原美術館による アーティストのレジデンスプログラム「ARKO2018」に招聘参加。山形藝術界隈の一員として も活動を行なっている。
https://tomokohisamatsujp.wordpress.com/

JOURNAL | art node artnode.smt.jp

アートノード ジャーナル 5号 2019年3月30日 発行
編集長｜甲斐賢治（せんだいメディアテーク）
編集｜渡邊曜平（せんだいメディアテーク）／磯崎未菜、長内綾子（communa）
アートディレクション・デザイン｜homesickdesign
印刷｜株式会社文展美術印刷

お問い合わせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1／TEL：022-713-4483
E-mail：artnode@smt.city.sendai.jp／URL：http://www.smt.jp

アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」に多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台に創出する事業です（2016年度～）。

本紙ジャーナルは、アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。

※「アートノード」は「せんだいアート・ノード・プロジェクト」の略称です。

せんだいメディアテーク sendai mediatheque

© 2019 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます この用紙はリサイクルできます。

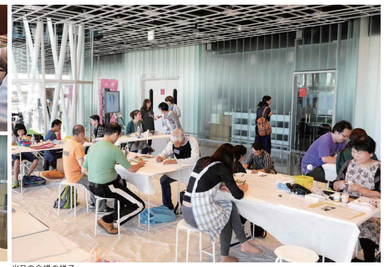
障がいのあるなしにかかわらず、表現を楽しむ場

イベントレポート

《SHIRO Atelier&Studio》ってどんなところ？

市内の文化施設を活用し、文化芸術の動きを推進する「仙台市文化プログラム」（*1）として実施されている《SHIRO Atelier & Studio》。在仙のクリエイターや表現者たちとの協働を通して、障がいのある人が主体的に関わる表現の場づくりや、障がいのある人とその家族が市内の文化活動を知ることで新たなネットワークを生み出すことを支援する、特定非営利活動法人イエプル・アート・ジャパン（*2）によるプロジェクトです。今回のジャーナルでは、2018年9月22日に開催された第1回のアトリエ活動を紹介します。

つくったものをみんなの前で発表！



当日の会場の様子

せんだいメディアテークの7階に出現したアトリエ空間には、障がいのある人も、そうでない人も、自由に創作活動を楽しむことができるように、作業のしやすい広い机が置かれ、色鉛筆やクレヨン、水彩絵具から マジックペンまで、色とりどりの豊富な画材がずらりと並べられていました。

アトリエ活動のファシリテーターを務めるのは、画家・作家の瀬尾夏美さんと美術作家の佐竹真紀子さん。「この場では、なにをつくらなきゃいけない、描かなきゃいけないということはありません。だけど、せっかくみんなで集ったので、まずはじめにみなさんの表現のヒントになるかもしれない宮城の民話を聞いてみたいと思います」との挨拶から始まりました。続いて、「みやぎ民話の会」顧問の小野和子さんが登壇。小野さんは、50年近く継続している東北地方での民話採訪活動の中で、数え切れないほどの話を記憶されています。

普段は民話の聞き手である小野さんが、この日は語り部となって、本イベントが開かれた秋の味覚である大根やきのこが登場するふたつの話を紹介。ひとつ目は、あるとき畑から大根が無くなり、「一体誰が盗んだんだ～」と犯人を探していると、夜中に大人と子供のタコがやってきて、大根をがりがりと食べってた、というお話。ふた目は、月夜の晩に古いお寺で和尚さんがひとり寝ていると、たくさんの小さな白いけり物が現れて、「塩と味噌つけろ」と踊り、和尚さんがそのあとをつけて行けば、大きな杉の切り株に生えている千本しめじにたどり着いたというお話。

小野さんの奇妙で美しい語りを聞き終えた参加者のみなさんは、民話から想像した夜の絵を描いたり、粘土で親子のタコをつくったり、すぐに思い思いの創作に熱中しました。瀬尾さんと佐竹さんは道具の使い方を習った参加者は、普段使用しているものとは別の画材に挑戦する人も多く、同じ空間に集うことで互いに影響し合い、ひとりで行うのとは違う表現へと向かう時間を過ごしました。

アトリエ活動の最後には、つくったものを発表し合い、民話から想像したことや工夫した点など、それぞれの視点を共有することで、新たな会話や温かい交流の場が生まれました。

民話がアトリエにもたらしたもの

ファシリテーター 瀬尾夏美さん

アトリエに集った人たちが、誰かの隣で創作することの意味を見出せるような仕掛けをつくりたいと思い、みんなで民話を聞く時間を設けました。民話は、参加者のみなさんが生活するここ宮城県で ずっと昔から語り継がれています。お話の中には、ある弱い立場にいる人について語られることが多く、ユーモアに富み、私たちが日常を生きるヒントがたくさん含まれていると感じます。そんな民話が、なにか生きにくさを抱えている人たちや、そのご家族へ伝わる機会があったらいいなと思いました。民話を聞くことで、言葉からイメージをもらい、その人がこれまで持っていなかった新たな技法や線が生まれたと思います。また、できあがったものがひとりひとりまったく異なっていて、同じお話を聞く経験からそれぞれの想像の仕方があったんだなという発見が参加者の皆さんにもあったのではと感じています。

ふたつの民話を語る小野和子さん

（*1）仙台市文化プログラム
2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、仙台市及び仙台市市民文化事業団が市内に拠点を置く団体または個人と共催で実施する文化プログラム。

（*2）特定非営利活動法人エイプル・アート・ジャパン
障がいを持つ人をはじめとする、さまざまな生きにくさを抱える人たちの表現活動を支援している。1995年より「エイプル・アート・ムーブメント（可能性の芸術運動）」を提唱し、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動をすすめてきた。

山形・宮城

山形藝術界隈

ステレオタイプではない「東北」を問う芸術運動体

『山形藝術界隈』は、（山形ビエナーレ2016）期間中に開催されたアートの市「芸術界隈」（ディレクター：三瀬夏之介）から派生した芸術運動体だ。絵画・音楽・パフォーマンス等それぞれの表現活動を行なう9人のメンバーが集まり、既存の枠組みにとらわれない新たな作品制作・発表のあり方を模索する実験的な活動を行なっている。

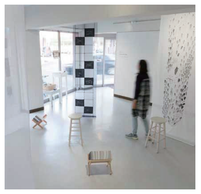
2017年の結成以来、精力的な活動を展開しており、2018年度は（Reborn-Art Festival2017）を機にアーティストの有馬かおるさんが設立した「石巻のキワマリ荘」で年間を通じたプロジェクトを立ち上げ、様々な展覧会やイベントを開催した。これらに係る費用は、一般的には行政や企業や芸術文化助成金に頼ることが多いが、山形藝術界隈のメンバーたちは自分達に一番適した方法を模索し、クラウド・ファンディングならぬ「友の会」の形で広く支援を募るという方法を試みた。賛同者には、支援金と交換に「藝術」と描かれた壺が送られる。これは、地方都市におけるアーティストの自立可能性を「経済」の側面から試みようという彼らの実践でもある。

日本各地にはさまざまな形態のアーティスト・コレクティブが存在するが、山形藝術界隈のあり方は一味違う。リーダーはおらず、特定の目標もないとうが、展覧会などを通して出会った鑑賞者、応援者、批評家などが緩やかに連帯することで「界隈」が形成され、拡張されていく。地方のデメリットを逆手に取り、ステレオタイプの「東北」ではないリアルな「東北」が、それぞれの表現を起点に、運動体となって立ち現れていくかのようだ。

今年は東北各地でそんな彼らの作品／運動に出会えそうだ。今夏8月3日から開催予定の《Reborn-Art Festival 2019》への参加が決定しているほか、秋には盛岡の「Cyg art gallery」（右下記事参照）でも展覧会が予定されている。

「山形藝術界隈展ーー（山形藝術界隈オールスター展）」石巻のキワマリ荘・GALVANIZE gallery／宮城、2019

「山形藝術界隈展〇ニ」白鷺町文化交流センター あゆーむ／山形、2017



是恒さくら「ありふれたくじら」展示風景（広島市 横川創苑）写真 鹿田真彦

大樋秀樹（名もなき神々）2019

是恒さくらは、アラスカや東北で先住民、捕鯨文化、漁労文化等のフィールドワークを行い、造形やリトルプレスを通して異文化間の価値を共有の可能性を探る活動を展開している。

大樋秀樹は、空洞化した（中心市街地）や、山に存在する（消滅集落）、（廃村）を舞台に、その環境や自然と対峙した行為を記録した作品を展開している。

◎メンバーの活動

山形藝術界隈
参加メンバー：大樋秀樹、工藤玲郎、後藤拓朗、是恒さくら、渋谷陽史、白丸たくま、出口恭一、根本裕子、久松知子（2019年3月現在、50音順）
http://geijyutsukaiwai.org/

「友の会」入会者へ送られる「藝術」壺（根本裕子＋工房SIC作）

特集

これからの東北をおもしろくする、地域に根ざした活動と人びと

今回の特集では、東北各地で地域の文化や風土を糧としつつ、独自の活動を展開する3つの団体を紹介します。ひとつ目は東北芸術工科大学の卒業生を中心としたアーティスト・グループ『山形藝術界隈』、ふたつ目は秋田公立美術大学を母体に誕生した『NPO法人アーツセンターあきた』、そして三つ目は、盛岡市でアート、デザイン、演劇、音楽など多様な事業を展開する『Cyg art gallery』です。アートを基軸としながらも、しなやかにその領域を広げる三者三様の取り組みとは？

秋田

大学をひらき、街を豊かにする アーツセンターあきた

『アーツセンターあきた』は、秋田公立美術大学が2018年4月に設立したNPO法人。大学内で展開している数々のプロジェクトや研究成果といったリソースと地域をつなげるべく、アートとデザインを用いた多様なプロジェクトに取り組んでいる。そもそもの発案者は、2014年より美術学部で教授を務めるアートノードでもおなじみの美術家・藤浩志さん。各地でプロジェクトを実践してきた藤さんのアイデアが、大学、そして秋田市をも動かしたかただ。

NPOには、日々、市民や企業から大小さまざまな相談が寄せられる。その内容を整理し、どんな教員とどのようなプロジェクトを立ち上げることができるのかを検討し、コーディネートをするのがスタッフの役割だ。担当教員は、プロジェクトを通して関わる人々がなにを学び得ることができるのかといった教育的視点も組み込む。学生は、大学の授業ではなかなか経験できない実践を通して、技術や知識を深められるほか、アルバイトになることも。

現在進行中の大型プロジェクトは、秋田市からの委託事業で旧秋田県立美術館を文化施設としてリニューアルする計画（仮称：秋田市文化創造交流館）を、市民とともに検討する「せばなるあきた」事業というものだ。2018年度は公募で集まった市民や学生とともに4回のワークショップを行い、施設のあり方や実現したい企画についての意見出しを行った。その内容をもとに、2019年度は人材育成講座などを展開し、2020年秋のオープン以降も市民が主体となって企画を展開できるような教育プログラムを検討している。

旧秋田県立美術館の内部。「せばなるあきた」事業で事業計画を検討。

◎事務長の三富章恵さんの前職は文化系の独立行政法人。NPOの職員募集がきっかけで秋田公立美術大学を知り、東京から秋田に移住を決意。「卒業後は25%程しか県内に残らない学生たちが、卒業後も秋田に残って仕事や制作の場を持ち続けられる、そんな仕組みを考えるのもNPOの役割です」と話す。地方の中核都市にぽっかり人が集まる現状を打破すべく、地域をなんとかしたいと考える人々がそれぞれの専門性を携えて街場からも集う。そんな場づくりが、美大から生まれた「アーツセンターあきた」で始まっている。

全国から集まった3チームの高校生が秋田で合宿！「高校生クリエイティブキャンプ」の様子

NPO法人アーツセンターあきた
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3
アトリエもりもった内 ☎FAX 018-888-8137／
http://www.artscenterakita.jp

岩手

Cyg art gallery

東北のアートがクロスする「星」

岩手県盛岡市内にある「Cyg art gallery（シグアートギャラリー）」（以下、シグ）は、東北の若手作家たちにとって表現の拠点ともいえる場所だ。岩手県庁や国の重要有形文化財「岩手県公会堂」からほど近くにある、趣ある古いビルの2階に、2011年12月にオープン。近隣にはセレクトショップやレストランなどが点在するまち歩きに最高のエリアだ。シグという名前は、北の十字星とも言われる白鳥座の「Cygnus」に由来していて、「東北のアートがクロスする場のひとつになりたい」との思いから付けられたそう。

ギャラリーの様子

東北にゆかりのある作家に焦点を当てた企画展を行っており、美術の他にも演劇作品やダンスパフォーマンスが上演されることもある。「盛岡の他、ダンスやパフォーマンスで活躍している人もいる。シグが、東北で活動する作家の作品と東北に住む人たちが交流する場になれたら」とスタッフの藤岡さん。

年に1回主催している「ART BOOK TARMINAL TOHOKU」ZINE、アートブック、画集、写真集、記録集、絵本など、さまざまな形の「本」の表現を募集し、展示・販売している。第7回となった昨年度は78点ものエントリーがあり、作品は展示期間が終わっても引き続き取り扱うこともあるそうで、ショップではここでしか買えないようなさまざまなアーティストの「本」がたっぷり！ どれを買おうか手にとって悩んでいると楽しくてすぐ時間が経ってしまいそうだ。

4月13日から5月12日はアニメーション作家である小野ハナさんの展覧会「ぼくと魚」、5月18日から6月16日は仙台在住の画家・樋口佳絵さんの展覧会が、シグの裏手に位置する「喫茶カルタ」と合同で開催される予定。

◎現在シグの業務を行なっているのは合同会社ホームシックデザイン。代表でアートディレクターの清水真介さんがたったひとりのメンバーの一人。デザイン事務所「homesickdesign」は、本紙をはじめ、東北各地のさまざまなデザイン物を手がけている。

ART BOOK TERMINAL TOHOKUで集まった作品たち

Cyg art gallery／シグアートギャラリー
〒020-0066 岩手県盛岡市内丸16-7 大手町ビル2F（旧第9ビル）
TEL：019-654-8137
http://www.cyg-morioka.com/

JOURNAL SCHEDULE

ワケあり雑がみ部
2019年5月～8月（8月成果発表）
せんだいメディアテーク7階 雑がみ部部室 ほか

川俣正／仙台インプログレス
2019年7月 仙台市宮城野区岡田 新浜
2020年2月 せんだいメディアテーク

アートノード TALK
2019年随時開催 仙台市内各所

青野文昭 展

2019年11月2日～2020年1月12日
せんだいメディアテーク 6階ギャラリー 4200

「なおす」ことを主題に、家具や日用品など廃棄物の欠損箇所を補完することで新たな形態を生みだしている仙台の美術作家、青野文昭の展覧会。

いらないタンスいただけませんか？

青野さんの作品素材となるタンスやテーブルなどの木製家具を募集しています。処分をお考えの家具をお持ちで、ご関心のある方はご一報下さい。

●仙台市及び近郊にお住まいの方
●無償でお譲りいただける方
●電子メールに家具の画像を添付してください（木製の家具に限定いたします）。
●作家が選択しますので、ご連絡いただいた全ての家具をお引き取りするわけではありません。また、運搬が困難な場合（エレベーターのないアパートや階段を使用する場合など）もお断りすることがございます。※5月末日まで募集

ご連絡・お問合せ先
せんだいメディアテーク企画・活動支援室
E-mail: office@smt.city.sendai.jp
氏名、住所、電話番号をご記入のうえ、家具画像を添付いただき電子メールでお送り下さい。

最先端のものづくりに触れるアトリエ Fablab SENDAI-FLAT

Fablab SENDAI-FLAT（ファブラボセンダイフラット）
有限会社菊信紙工所内
〒984-0001 仙台市若林区卸町2-6-30（ヒルズ4F）
仙台市営地下鉄東西線「荒浜通り」駅 南1出口より徒歩5分、「仙台」駅 徒歩8分 http://fablabsendai-flat.com/

2013年に仙台市一番町にオープンした、個人やクリエイターのための「ものづくりの実験・実践の場」で、3Dプリンタ、デジタルミシン、カッティングマシン、UVプリンタなどのデジタル工作機械を、講習会を受けて使うことができます。機械の使い方に精通した、スタッフの小野寺志乃さんと大網拓真さんが対応しています。

伝統工芸の技術継承や技術的な改良にも取り組んでおり、ジャンルを問わないものづくりに取り組める、仙台では貴重なスタジオです。

写真：浅野義弘

パンク精神が息づく DIYスタジオ analog

仙台市六丁の目にある、DIY印刷加工スタジオ「analog（アナログ）」。有限会社菊信紙工所が工場の一部を改装し、2016年にオープンしました。シルクスクリーン・活押し印刷・レーザーカッターなどの特殊加工機を貸し出し、特殊製本も請け負っています。使い方のレクチャーもあり、初心者でも使いたいイベントも開催しています。

担当の菊地充洋さんは、四代目。海外ツアーもこなすハードコアパンクバンドのメンバーでもあり、パンクのDIY精神が生み出した場所とも言えるかもしれません。

analog（アナログ） 〒984-0001 仙台市若林区六丁の目町2-26 仙台市営地下鉄東西線（六丁の目）駅徒歩2分（北1出口）徒歩5分 http://www.analogexpress.net/

ほしいものは、じぶんでつくろう 仙台DIYスポット案内

展覧会

進化する「野帳（やちょう）」

考古学者 河内一浩の記録生活

2019年
2月22日（金）―4月29日（月・祝）
金・土・日・祝のみ開室
13時―20時／入場無料

野帳（やちょう）とは、野外調査などの現場で聞き取り記録を残すために用いられるノートのこと。以前は専門家の道具だったが、今では趣味の記録やスケッチ帳などとして、愛用者は増えつつあります。考古学者・河内一浩さんはそんな野帳使いのレジェンド的存在です。学生の頃から書きためた野帳は450冊を超えるそうで、会場には魅力ある線のタッチで描かれた河内さんのスケッチが所狭しと並び、ひとつひとつをじっくり眺めることができます。「記憶のための記録の中身は自分史でもあると」と語る河内さんの世界をまるごと覗き見を分けてもらうことで、私たちがこれまでに見てきたものの、そしてこれから目にするものへの面白いつなぎがありそうです。本展は美術家である伊達伸明さんの企画で可愛らしいスリットスケッチの数々を、どうぞ会場でお楽しみください。

◎河内一浩（かわち かずひろ）／考古学者／1946年大阪生まれ。現在、羽咋市考古博物館長。世界文化遺産推進室／小学生から考古学に興味を持ち現在も研究を続けている。1995年より「エイプル・アート・ムーブメント（可能性の芸術運動）」を提唱し、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動をすすめてきた。

◎伊達伸明（だて のぶあき）／美術家／東京都の企画展作、取り壊された建物のウロコ状の金属を再利用し、それを用いてスリットスキャンを制作し、元利の住人に手渡す「建築物のクレイジー保存計画」を主宰する。

TRAC Tohoku Research-based Art Center 東北リサーチ＆アートセンター
仙台市青葉区大町2丁目3-22第五菊水ビル3階（地下鉄東西線 大町西公園 駅東1出口 徒歩1分）

仙台市東北の歴史・資源・課題などを調べ、アートや表現につなげる活動と交流のための拠点です。せんだいメディアテークが地域で展開するアートプロジェクト「アートノード」事業の一環です。